

篠原ユキオ

1948年 東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
(公社)日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

各地の寺社に見られる千社札は人々の寺社への信仰心や願い事のために許可を受けて貼り付ける物で、勝手に張り付ける事はできない。
よく二ユースになる歴史的建造物などへの落書き類とは根本的に異なるモノである。

お札の想い

千社札やお札に限らず、巷には多種多様なシール、ステッカー類が溢れている。旅行鞆に貼られた航空会社やツーリストのステッカーなどはその人の旅行者としてのステータスシンボルであったりする。落語『牛ほめ』の中に、家の普請を誉めて小遣いを稼ごうとする男

が、床柱の大きなフシを指してそこに秋葉さんのお札を貼ればフシを隠せるし火除け魔除けにもなると言う件りがあるのだがわが家の玄関には転居した時から貼られている小さなお札があって、それが何十年も経った今も剥がせないままである。



ヘルプマーク

ヘルプマークは目に見えない障害を持つ人や妊婦などのために作られたマークだ。以前に椎名林檎さんの新曲アルバムに関連グッズがこれに酷似していたという事でニュースになったので知った人も多いだろう。このマークのついたタグを見えやすい所やバッグなどに付けて健常者にアピールするためアイテムだがまだまだ認知度は低いようだ。障害者に対する意識の高まりは近年進んでいるが実際の行動には繋がっていないように思える。



思い返せば昭和の時代は差別表現となるような事象はあらゆる部分に見られた。丹下左膳も眠狂四郎も座頭市も障害者である。昭和にはそういうヒーローたちが大勢いたのである。



フランケンの食材



時代劇に登場する長屋の住人の着物はたいていが『つぎはぎ』だらけである事が多い。貧しさを表現する定番ビジュアルである。ところが現代ではパッチワークとして小さな袋物からタペストリーまでさまざまな表現がみられる。古布や着物のリサイクルなどで作られた個性的な女性たちのファッションもそのひとつだ。私もおパッチワークジャケットをいくつか持っているが、実際に街中で同じように着ている男性と出会う事は少ない。漫画家としてはフランケンシュタインがパッチワークジャケットを着ている場面を考えたりするが、現代では微妙な表現とされるかもしれない…。

野球小僧の記憶



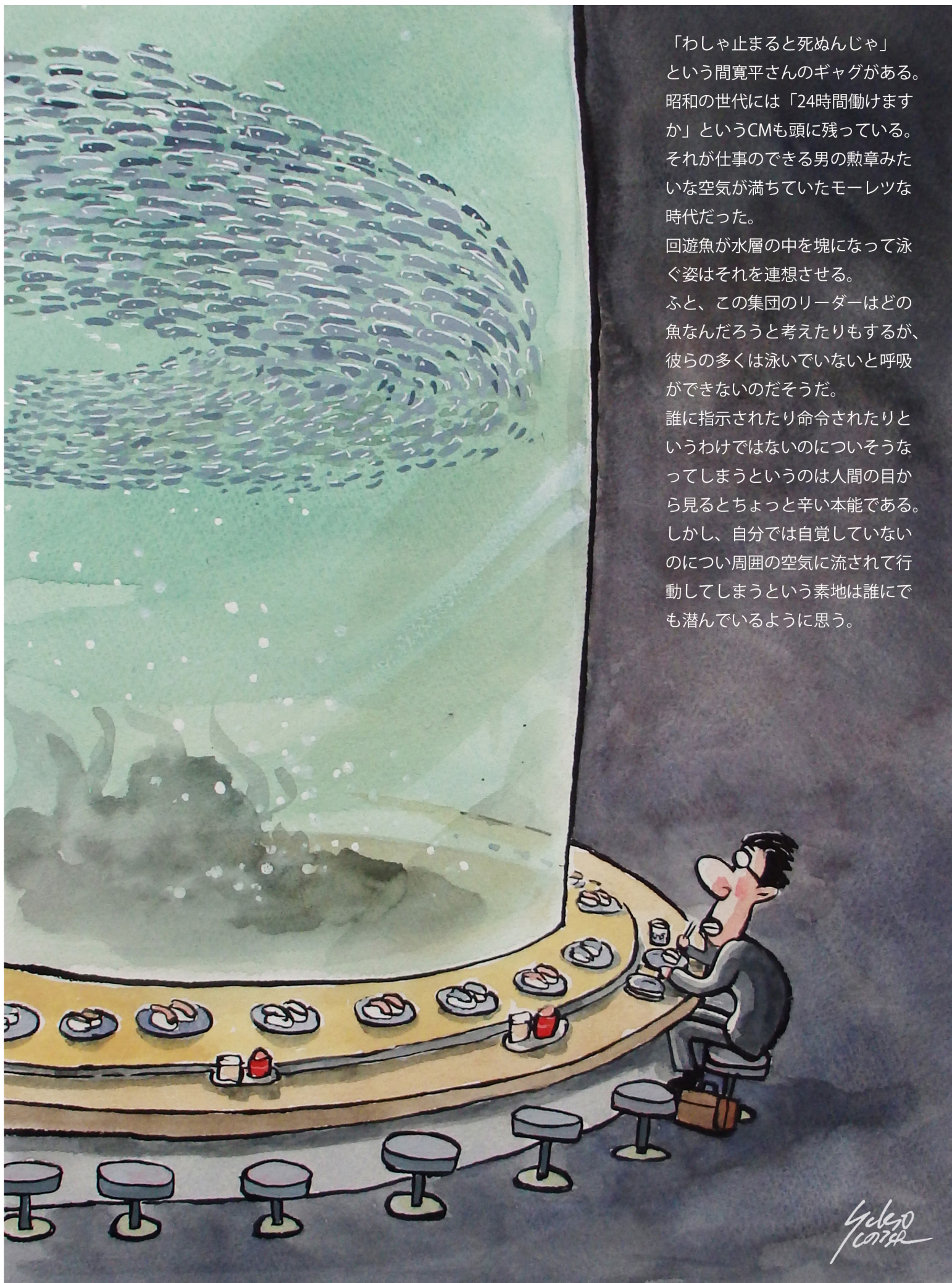
団塊世代の男の子はそこそこの空き地があればどこでも野球をしていた。

少年野球のチームなどは珍しい時代だったが、それぞれが愛用のバットやグラブを持って集まった。

グラブを持っている子が少ない時はお互いにシェアして使った。

近所の家にボールが飛び込んでカミナリ親父に叱られるという、漫画の定番シーンもごく普通の出来事だった。

草ムラに転がったボールを探していたら犬のウンチが付いてしまったり、うっかり踏んでしまったりというのも普通だったが、近くに水道が見つからない時は草や地面に擦り付けたりしてウンチを拭いてゲームを続けたものだった。今は犬のウンチも見かけなくなったが野球どころかキャッチボールさえする事ができない環境になってしまってる。野球ファンは相変わらず多いが、近頃は野球はするものではなく、見るものになっているのだと思うこの頃である。



「わしゃ止まると死ぬんじゃ」
という間寛平さんのギャグがある。
昭和の世代には「24時間働けますか」というCMも頭に残っている。
それが仕事のできる男の勲章みたいな空気が満ちていたモーレツな時代だった。
回遊魚が水層の中を塊になって泳ぐ姿はそれを連想させる。
ふと、この集団のリーダーはどの魚なんだろうと考えたりもするが、彼らの多くは泳いでいないと呼吸ができないのだそうだ。
誰に指示されたり命令されたりというわけではないのについそうになってしまうというのは人間の目から見るとちょっと辛い本能である。しかし、自分では自覚していないのについ周囲の空気に流されて行動してしまうという素地は誰にでも潜んでいるように思う。

Yukio
1974

〈廻る!〉